

中学生の運動・スポーツとジェンダー意識

—ジェンダーとしての「身体性」の視点から—

羽田野 慶子（東京大学大学院）

1. 本研究の目的

バトラーに代表されるポストモダン・フェミニズムは、セックス＝生物学的性／ジェンダー＝社会的・文化的性という従来の捉え方を批判し、二項対立的なジェンダーという問題構制が、セックスを含めた身体レベルの性差を構成しているという新たな知見をもたらした。ここで、ジェンダー研究の新たな問題領域として浮上してくるのは、「身体性」にかかわる諸問題である。「身体性」にかかわる問題領域は、出産・生殖や買春問題などセクシュアリティにかかわるもの、摂食障害・服飾など身体イメージにかかわるものなど多岐にわたるが、ここでは「身体性」をめぐる一側面としてとくに運動・スポーツを取り上げる。

運動・スポーツという問題領域は、一般にそこでの男女差が生物学的性差によって説明できると思われている領域の一つである（上野1998）。しかし、「ジェンダーがセックスを指定する」というさきの知見に従えば、運動・スポーツという領域にみられる男女差もまた、文化・社会的レベルにおける二項対立的なジェンダーを反映したものであり、かつそこに生み出された性差がさらに二項対立的なジェンダーを構成し、補強する機能を有するものと捉えることができる。

本研究では、人間形成ないし社会化の途上にある中学生を対象とし、彼女ら／彼らの運動・スポーツへのかかわり方とジェンダー観との関係について考察する。その際、運動・スポーツにおけるジェンダー・ギャップを、所与のものとしてではなく、形成されてきた／形成されつつあるものとして捉えることを前提とする。そのうえで、運動・スポーツにおけるジェンダー・ギャップ及びイントラジェンダー・ディファレンス（性内分化）を、他のジェンダーにかんする意識・行動との関連を見ることによって、その連関構造を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究において分析対象として用いるのは、98年度に行った都内公立中学二年生を対象とした質問紙調査（サンプル数912名、以下「98年度中学生

調査」と記す。）と、99年度から2000年度にかけて行った都内公立中学三年生を対象としたインタビュー調査である。なお、質問紙調査は西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央との共同研究であり、インタビュー調査は矢野博之との共同研究の一環として行ったものである。

3. 中学生の運動・スポーツにおけるジェンダー・ギャップ

まずはじめに、質問紙調査の結果から、中学生の運動・スポーツにおいてどのようなジェンダー・ギャップが存在するかを確認する。98年度中学生調査では、運動・スポーツにかんする質問項目として、運動・スポーツ全般への志向性にかんする質問と、部活動にかんする質問を用意した。ここではまず、それぞれの質問項目の結果を概観することによって、中学生の運動・スポーツにおけるジェンダー・ギャップを確認する。

（1）運動・スポーツ全般への志向性にかんして

まず、運動能力の自己評価を男女別に見ると、運動が「得意」と答えた者の割合は、男子では約半数を占めるのに対し、女子では1/3強にとどまっている（「得意」「得意とふつうの間」と答えた者の合計。男子51.4%、女子35.1%）。ちなみに、学業成績の自己評価における男女差はほとんど見られない。また、「運動が嫌いである」と答えた者の割合は、男子15.7%に対し女子33.5%であり、女子が男子の約2倍に及んでいる。

さらに、「スポーツ観戦が好きである」、「将来スポーツ選手になれると思う」、「スポーツ少年団などに参加したことがある」といった項目においても、女子よりも男子が有意に肯定的な回答を示している。これらの結果を総合すると、運動能力に対する自信、直接的・間接的なスポーツ経験の量など、運動・スポーツ全般に対する接触や志向の度合いにおいて、男子の方が女子よりも常に高いということがわかる。

（2）部活動にかんして

次に、中学生にとっての運動・スポーツ活動の中でもっとも大きな比重を占めると考えられる部活動におけるジェンダー・ギャップを確認する。

まず、部活動への参加を見ると、男女とも約9割がなんらかの部活動に所属している（男子90.8%、女子91.2%）。ただし、その内訳をみると、男子の8割以上が運動部に所属しているのに対し、女子は運動部と文化部の割合がほぼ半々になっており、運動部への所属率という点では大きな男女差があることが確認できる（男子83.5%、女子49.1%）。

さらに、部活動へのコミットメントの内実にかかわる項目について検討すると、次のような結果が得られた。まず、「部活動に力を入れている」のは、運動部に所属する者の方が文化部よりも約2割多いが（運動部76.6%、文化部56.8%）、男女差は見られない。次に、運動部所属者が部活動のどういったところを楽しみを見出しているかという点について見てみると、男子は「練習や活動」を挙げる者が多いのに対し（男子42.2%、女子34.4%）、女子は「友だちとのおしゃべり」を挙げる者が多い（男子27.0%、女子42.1%）という違いが見られた。

以上の結果より、中学生の部活動参加についてまとめると、①男子は運動部に所属するものが大半を占めているが、女子は運動部／文化部の割合が半々である、②運動部のほうが部活へのコミットメントの度合いが高いが、③運動部男子は練習や活動そのものに意義を見出しているのに対し、運動部女子はそこで得られる友人関係に価値を見出している者が多い、というジェンダー・ギャップが存在するといえる。

4. 中学生のジェンダー意識

(1) 「ジェンダー意識」概念について

次に、中学生がジェンダーに関してどのような意識をもっているかについて概観する。

本研究では、ジェンダーにかんするさまざまな意識を包括的に示す概念として、「ジェンダー意識」という語を用いることとする。「ジェンダー意識」には二つのレベルがある。ひとつは、社会における男性／女性の位置関係を一般的にどのようなものとして捉えているかというレベルである。もうひとつは、個々人が男女どちらかの性別を「持つ」ことによって経験的に形成される、自己の性別に対する個人的意識のレベルである。ここでは、前者を「対社会的ジェンダー意識」、後者を「対自己的ジェンダー意識」と呼ぶこととする。

(2) 中学生の対社会的ジェンダー意識

本研究で対社会的ジェンダー意識の項目として用意した5つの項目について、肯定的な回答を示し

た者の割合を男女別に集計した結果は次の通りである。

- a. 男は女より体力がある（男子78.3、女子87.2）
- b. 男は女より頭がよい（男子17.5、女子19.0）
- c. 男は仕事、女は家庭（男子46.3、女子29.7）
- d. 恋愛は男性主導である（男子62.5、女子59.4）
- e. 運動が得意な人はもてる（男子58.0、女子35.1）

以上の結果から、中学生の対社会的ジェンダー意識は、①知的能力の男女差を認める者は比較的少ないが、体力における男女差を認める者は約8割にのぼり、その傾向は女子のほうが強い、②伝統的な性別役割分業観を受け容れているのは女子より男子のほうが多いがそれでも半数に満たず、一方中学生にとってより身近な性役割観である男性主導の恋愛観は男女とも約6割が受け容れている、③男子は運動が得意であることが異性へのアピールになると考える者が多い、とまとめることができる。

(3) 中学生の対自己的ジェンダー意識

対自己的ジェンダー意識の各項目について肯定的な回答を示した者の割合は次のとおりである。

- f. 自分は女（男）らしい（男子44.6、女子28.0）
- g. 性別で損をした（男子33.2、女子64.2）
- h. 異性に負けたくない（男子57.9、女子51.5）
- i. 生まれ変わっても今の性別がよい（男子83.7、女子46.7）

以上の結果をまとめると、男子は概して自己の性別を受け容れているのに対し、女子は自己の性別に対する不満や不適応を感じている者が多いといえる。

5. 運動・スポーツへの志向性とジェンダー意識の関係

運動能力の自己評価、及び所属部活動（運動部／文化部）によるジェンダー意識の違いについては、性別役割分業観、恋愛観、性別適合度（「男らしい」と思う）等の項目において、男子では全般に正の関連が強いことが明らかになっている。一方女子の場合は、一部錯綜した関連性が見出されており、この点に関してはインタビュー・データによる補足を加えて解釈することが必要である。

運動・スポーツとジェンダー意識の全体的な関連性、及び質的データとの接合をふまえた考察に関しては、当日配布レジュメを参照されたい。